

『北海道の教育』 1 国語教育

一 「国語教育」を巡る深刻な現状とその中心課題

荒木美智雄

1 『改訂学習指導要領』の課題及び国語教育の現況

『改訂学習要領』は、二〇二〇年度小学校が全面実施、中学校が二一年度実施、高校がいよいよ二二年度に実施（年次進行）される。これらの問題点については、昨年度の『北海道の教育』で三点、①「グローバル化」に伴う「効率優先」教育の弊害②「道徳教育」の危惧③「カリキュラムマネジメント」の問題点を私（荒木）が指摘し、それらを克服する視点としての「学校づくり」や具体的な「国語教育」の改善策を提示してきた。

その方向性をもう一度明確にすれば、「民間教育機関」が培ってきた諸成果（実践的蓄積）を大切に育て、さらに自主的・発展的に引き継ぐことが重要であろう。例えば、「全国生活指導研究協議会」が理論付け実践してきた「生活指導の理論と実践例」がある。竹内常一氏の『若い教師への手紙』『子どもを自分くずしと自分づくり』などは名著で明らかなことだけでなく、詳細な実践例の蓄積たる「指針」、「手引き書」であろう（註1）。国語教育界では、「児童言語研究会」「教育科学研究会」「文芸教育研究協議会」、「科学的『読み』の授業研究会」、さらに、作文では「日本作文の会」など、その実践・実績の豊富さや系統的学術性は、圧倒的であり、そこから基礎基本を学び取り、応用を

含め発展させることが、現在、極めて重要である。

ところが、教育現場では、「多忙化」、「管理的教育」の強化、保護者への煩雑な対応化などで、孤立し、協力体制のない様々な諸問題が、教師の前に立ちほだかり、困難性を極めている現状がある。今こそ、この「合同教育研究全道集会」に一人でも多くの参加者を募り、力を結集しながら、共に教育研究や授業実践を高め蓄積し切磋琢磨することが、緊急に求められていると痛感する。

今回の『改訂要領』の本丸は、小・中学校でなく、高校教育である。小・中学校の延長線上であった『改訂』が、主要な柱となるのは、グローバル化の進展により、自ら考え対話して多様な視点で学ぶことが求められるからである。

従来、高校では、一方的に教授する「講義型」が多く、「討論型」「体験型」が欠落していたと考えられ、「アクティブ・ラーニング」を活用しようと文科省までもが躍起となっている。その象徴的な提言が『改訂』の「主体的・対話的で深い学び」である。

また、改革の要が『改訂要領』と同時にもう一つの柱が「大学入試改革」である。これは、「入試が変わらなければ教育は変えようがない」という声に押され、大学入試センター試験の後継として二十年度から「大学入学共通テスト」が始まる。従来型の選択問題だけでなく、「記述式」の問題を導入し、「深い思考力Ⅱ応用力」を測定することを目指し、さらに、英語では「四技能（聞く・読む・話す・書く）」の能力を図るため「民間業者

テスト」も取り入れることを提言している。ただ、「記述式」の採点の煩雑さ（採点する時間的量的問題と基準の公平さ）や複数の異なる審査基準による「英語業者テスト」をそのまま活用することに難色を示す「東大」などの動向もあり、課題は山積みであろう。

ここで三点、日本の従来の「学校教育」の評価されることを補足したい。第一に、日本の従来培ってきた「教育活動」の再評価ということである。それは、エジプトの教育視察団が来日し、特別活動（特活）に注目、礼儀正しさや教室の掃除活動による社会性の育て方を高く評価して、取り入れたいと準備中であることに象徴的に現われている。自国では教えることが中心で「特活」はないということ、日本の「教育制度」に関心が集まっているという。さらに、中東やアジア・アフリカでも注目され、活用する国々が目白押しである（『朝日新聞』2018/2/15）と新聞報道もなされた。

第二点目は「総合学習」である。「総合的な学習の時間」は民間研究諸団体が長年培ってきた「総合学習」という「コアカリキュラム」の一環であり、これが高く評価され、学校現場に根付いたことは、素晴らしい成果であろう。

第三点目は、「ゆとり教育」の再評価である。PISAの学力調査の中心人物、OECDのアンドレアス・シュライヒャー教育・スキル局長のコメントが興味深い。○三年調査（順位低下の大騒動）を分析すると、オープンエンド（正解多数問題）では、問題正解率が最も上昇したのは日本の子どもたちと評価する。「社会は性急な判断をしたくなるが、教育投資の効果は時間が

必要」と指摘し、「ゆとり教育は損失より、成果が大きかった」の真逆の「評価」を下し、衝撃的をあたえた（『朝日新聞』2018/3/20）を参照して欲しい。

このシュライヒャー氏は、同時にこんなコメントも出している。「知識で12ポイント下がることと創造的なスキルで4ポイント上がること（「ゆとり教育」成果）はどちらが大事だと思えますか。社会は性急な判断をしたくなりますが、教育への投資効果は時間が経たなければ表れないことが多い」と。また、教える内容の増加について「教える量と、教育の結果の質の間に相関関係がないこと（は明らかだ）。フィンランドは日本の授業時間の半分ですが、教育の成果はほぼ似ています。大切なのは教育課程の『深さ』です」とも語っている（傍線部は筆者＝荒木）。注目発言（註2）であろう。

ではこのような教育現場で小学校ではどのような取り組みを行っているのか、その「実践報告」を一つ披露し、論議の多面的な考察に役立てたい。

実践報告は次のものである。

高橋寿規（利尻富士町篤泊小）氏「国語指導」

この実践は四本の柱①「読み聞かせ」②「漢字指導」③「ノート指導」④「系統指導」というテーマ設定となっている。

①「読み聞かせ」では、4～9月の半年間毎朝10分間で行い、町のボランティアの方々協力をお願いし、多種多様な話をして貰い、特に「面白い話」「怖い話」に人気があり、声の強

弱、台詞の表現方法などの工夫もあり、読書好きな子どもたちを増やすことに役立っていると報告する。

②「漢字指導」では、「勝手な漢字指導5か条」を作り指導に創意工夫している姿が伝わる。「教科書単元から〈漢字〉を切り離す」「ただ繰り返し返す練習(ドリル)はつまらない」「覚えたら、使う(定着)などより実践的より系統的に学ばせるやり方は素晴らしい。

③「ノート指導」では、黒板に子どもが使うノートの「マス目」と同じ数の「マス目」を書き、板書と同じように書く指導の徹底をする。そこから「先生よりきれいに素早く書けるかな」と競争心を促すことも有効である。その結果「間違いの減少」や書く「意欲」が増進されたという。効果的なのは、「事前指導」↓即時・形成評価」を行うことだと提言する。④「系統指導」でも「文学系統指導《表》」「説明文系統指導《表》」を使って、指導ポイントを伝えることを心掛けているという。様々な工夫は、子どもたちに「還元」あれ、効果的であると私は高く評価したい。これらの実践例は、教科書編成に拘束(傍線部)され、『改訂要領』の形式をそのまま実践するのではなく、教師が、あくまで現場の子たちに即して創意工夫を行う「カリキュラム編成」の重視である。教師の努力はそのまま「成果」には直結しないが、長い展望とスパンを持ち根気強く取り組む「実践」の大切さであろう。

最後に「複式授業づくり」の「勝手な複式5か条」も興味深い。「共通課題」「おもしろそうにやろう」「スキマ時間対策をもたせておこなおう」などは、「複式」ならではの創意工夫があり、

他の学校でも大いに参考にすべき点であると思う。「複式」については、二度同じ内容を行うので効果的であると北海道と同じ環境下にある「フィンランド教育」でも評価される点は、忘れてはいけない重要な視点となっている。

以上、様々な課題を抱えている北海道であるが、規模の大小から、複式の劣勢と安易に評価を下さず、またその地域性からその特色を生かして、その学校の実態に合わせ行う「国語教育」を私たちは、求めていかなければならない喫緊の課題であろう。

2 日本語の基礎である「言語教育」の在り方をめぐって

この「言語教育」では、二本である。

池田和彦(深川西高)氏「よみに生かせる日本文法の学習」。

もう一本は、私(荒木)の「講座〈白川漢字学〉における実践」の二本が提出されたが、私の実践は割愛し、池田氏の報告を中心に、また詳細に論じたい。

池田氏は、全国教研での著名な「高橋太郎」「高瀬匡雄」両氏(共同研究者)から指摘されてきた「橋本文法Ⅱ学校文法」の非科学性を批判しつつ、その解決策として「日本文法」を国語教育にどう生かせばいいのかという方向性を模索した実践報告である。例えば、「書かず」「書かば」「(力行四段活用)であるから同じ「未然形」。しかし、「起きず」「起きて」「(力行下二段活用)は、同じ「起き」であつても、前者は未然形、後者は連用形となる矛盾。また、「書けり」「(り)は已然形接続」の「書け」が已然形(命令形)であり、「達成せり」の「達成せ」は未然形

というのは、この「活用形」に何の意味もないことを如実に表している端的な実例。こんな例題も出す。

a 私は昨日日記を書いた。

学校文法では下線部を動詞「書く」の連用形に過去の助動詞「た」が接続した形、と説明する。

b 私は今ハワイにいる。

これは、動詞「いる」の終止形(原形)としか説明しないが、終止形とすると、時制(テンス)が存在しない「謎の文」となってしまう矛盾。「今」を受けたれっきとした「現在時制」である。この「学校文法」では、動詞に「助動詞」は付着したとする単語の識別では、「時制」を全く無視し、態(ヴォイス)相(アスペクト)も全て同レベルの文法的要素であり、混在しようが、混在しないだろうが問題視されない矛盾。

しかし、日本語には、明確に「態」「相」「時制」が存在する。aの「書いた」は、過去形(時制)だけでなく、れっきとした、能動態という「態」が存在し、その「態」を文法的に問わない「橋本文法」は非科学的と指摘する。

全て「誤り」の根源は、単語の認定の仕方にある。それは、「助詞」「助動詞」は単語ではなく、文法的要素を担うべき、単語の一部分という原則から再出発すべきであろうと提言する。

このような視点で、古典単元の「伊勢物語」を文法的に指導し、見直した実践は大変貴重である。例えば「率て来し」の場合、「し」を過去「き」の連体形と教えるだけでなく「第一過去形」であることを「けり(第二過去形)」との、明らかな差異から正確に把握し、読解する指導は、素晴らしい。また、「過去形」

が客観的記述であり、「現在形」が主観的記述を認識させ、読み取る「古典教育」は多くの示唆を私達に与えてくれる素晴らしい実践報告である。

さらに「古文」だけでなく、「漢文」にまでその領域を広げ系統的に指導する力量は、私達も大いに見習うべき応用力に富む指導方法であろう。

この実践をさらに「北海道方言」と「アイヌ語」に指導まで広げているが、その実践内容は次回の機会に委ねたい。

3 国語教育の分水嶺たる「言語活動」の多様な実践例

「言語活動」の分野は、①「文学」②「評論」③「古典」④「読書活動」⑤「ディベート」その他の五分野に分け論じたい。

①「文学作品をよむための文法」とその深い「読解」の向上

この分野は、2の「言語教育」に引き続き池田和彦(深川西高)氏の次の実践報告で論究していきたい。

「日本文法を生かした文学作品のよみ」

米原万里『バクダッドの靴磨き』の授業から

この実践報告の教材である小説は、第一学習社の『標準現代文B』に掲載された米原万里の作品である。他の教科書に掲載されない「新教材」で、作者は、病に侵されながらも命と引き換えに「平和」を訴え、渾身の力で執筆した名著(物語)だ。

最初に、本作品の教材観が記されている。『こころ』や『舞姫』同様にこの作品は「額縁構造」をなし、主人公「僕」アフレドの語る「身の上話」は、サブストーリーであり、家族・叔父を殺

されることに対して主人公の激しい憎悪が「侵略者」米軍への敵対心へ転化する「物語」こそが、「メインストーリー」だと解する。そのことに付随して「作品」の瑕疵三点を鋭く指摘する。

① 個々の人物象の葛藤が優れているのに対して、が自分の身代わりになる「叔父」の言葉が「芝居的」と指摘。② 「叔父への反感」が「侵略者アメリカ」に対する憎悪へと変化するターニングポイントが「一枚の反米チラシ」ではアンバランスである。③ 「身の上話」にクライマックスの欠如を挙げる。

詳細な授業経過では、文法事項のテンスを含む「モダリティ（現在形Ⅱ主観）（過去形Ⅱ客観）」による解説、すなわち、「受給関係（へしてあげるⅡ利益供与）へしてくるⅡ利益授与）」により深層心理的な読み取りであり、また、「ニ格補語」による他動詞で動作主体者の識別など圧倒的な説得力を持ち論究している。特に、被害者家族の内「祖母」の意図的な回避、「プラスチック製」の手錠の意味など生徒と共にどれだけ時間を費やし、深い読み取りを行ったが窺い知れる報告で感動的な実践報告であると評価を惜しまない。

同様に授業の最後でも、「二丁」の拳銃を買う理由は、「興味深い。生徒Aは（一丁が米兵を殺害するため、もう一丁が）「自殺用」と解答。また、生徒Bは「二丁拳銃で乱射」と。さらに、生徒Cは、あつと驚く解答、それは隣の友人「イブラヒムだ」という結論は、授業実践の豊かな読み取りの大いなる成果であると痛感させられる。そんな活発、かつ深い意見交流を含む論議の末に正解を導く「過程」が、国語授業の実践の大成果であ

ろうと感じる。

もう一点「小説を通して考えたこと」では、深められなかったと池田氏は不満を漏らす、「4組男」の「復讐は復讐を産み悪循環となる」と明確に「戦争の本質」をつき、この小説の主題に肉薄していると私は、考える。

主題の把握については、亡くなった「祖母」や幼い「妹」は、唯一の生存者「僕Ⅱアフメド」が「目には目を」の思想で報復するテロリストになり、戦争当事者になることをはたして望んでいたかどうかと考えさせる方法もあったのではないかと思う。また、「ジャーナリスト」としての使命とは、取材報酬として「何」を為し、「何」を為すべきでないかを考える絶好の「作品」であろうと、その教材の主題設定を高く評価したい。

②義務制と高校の「説明的文章」「評論」についての実践

二本の報告である。

齋藤鉄也（厚岸町立太田小）氏

「教材分析・解釈 ビーバーの大工事」

大澤信哉（南幌高）氏の〈評論「何のために『働く』のか」をめぐる多面的なとりくみ〉

齋藤氏の報告は、詳細な「授業記録」が添付され、どんな読み取りを行ったのが、詳しく分析できる素晴らしい実践となっている。「めざす説明文の授業」も「認識の方法論Ⅱ本質・法則・真理・真実・価値・意味」を科学的に解析し、「説明文」の論理過程の価値を明確に規定しつつ授業を展開する「方法論」

は、学ぶべき多くの示唆に富む実践となっている。さらに「教材観」「作品の構造」を子ども視点から充分考量しながら、叙述する報告は、見習うべき多くの「視点」が提示されている。

教材として、客観的論述を行いために、「比喩」「数字」「写真」「ガリガリ」「ドシーン」「ぐいぐい」。また、説明の比喩では「まるで」のようです。「オールのような形」なども分かりやすく取り上げ、「読解」に関連付けている点は、高く評価したいと思う実践。

最後の総括として「この教材でどんな力を育てるのか」の項目では、「物語の手法」「説得の論法」「時間の順序にしたがった説明」「論理性」「表現の多様性」「声喩・説明のための比喩」「数字の活用」「写真・挿絵の活用」などは、「評論」を読み解くための多くの「仕掛け」を学ぶ最高の「教材」かつ詳細かつ丁寧な「実践記録」であると称したい。

大澤氏の南幌高校の実践、「評論」の報告を見ていこう。教材は姜尚中の「何のために『働く』のか」(大修館書店「新編国語総合」)を使って、「働く」というテーマを掲げ、実践した「国語表現」の授業の展開である。最初に「何のために働くのか」という、各段落の「ワークシート①②③」を効果的に活用し読解を図り、自分の意見と他者の意見を全体共有し、筆者の主張を絡めて「主題」を探究する実践である。これだけに終わらず、「アンケート分析」を活用し、補助教材諸富祥彦氏の「評論」なども取り入れ、VTRの視聴、「労働法」の講義も行い、さら

に、「働く人のルール」まで学ぶという「総合学習」的な多彩な実践報告となっている。

最後の、五「生徒の『振り返り』から」では、学んだ内容、教訓、考え得た「思考」が明確に表現され、その成果が窺い知れる。「ホームレスの男性が『人間らしい感情』が戻ったとかんじたのは、他者から声をかけられ、社会の一員になれた」というところでは、「働く意味」が如実に表れている。「初めて他人から人間として接してくれたことによるうれしさや(略)自分は社会nという中で小さいことかもしれないけれど、必要な存在なのだ、やっと思えた」というところにも、働くことが、賃金や生活のために必要最低限なことを越えた「価値」を見出ししていることに私も感動する。

実践レポートの「振り返り」文が短文であり、より内容のある「意見文」(一定の長さ)まで書かせればより素晴らしい「実践」となると私は感じる。次回に期待したい。

次に、古典教育の言語活動であるが、その「実践報告」は、一本、私(荒木)の〈伊勢物語「梓弓」の「みやび」論―「相聞歌」における時制と作者の多数性〉であるが、これも割愛する。

③多様な生活作文で「賢く、豊かに、逞しく」に表現力を培う

「表現活動」「作文」の言語活動では、小学校から二本の実践報告がなされた。レポートは次の内容である。

市来健（江差小）氏「はじめてのあのねちよう

—1年生、生活の中の えん けら ぶん」

斎藤鉄也（厚岸町太田小）氏「書くこと、思いを伝えること、生活を意味づけること」1・2年生学級前半の実践から」

では、先ず市来氏の実践から考察しよう。氏は、母語で思考するため、脳を活発化させる「綴る」という活動は、五感を駆使し「自分らしさ」の形成を促し、心の中に自分を見つめるも一人の「自分||自我」が生じるが、その認識過程を通じて「感動」「共有」「葛藤」を繰り返すことが「生活」「生きる」ことであると規定し、その上で「綴る」という「表現活動」を取り上げ、実践した報告となっている。指導形態は、書かせたあと、全員で「読み合い」「疑問」を出す中で分かったことを「赤ペン」を入れ「1学年綴り方通信 えん けら ぶん」に掲載し、発表（読み合う）するということ、そこを特に重視する。例えばY君の作文を取り上げよう。そこは、3行しか書いていない「素朴」「拙さ」に溢れているが、同時に「直（ひた）向きさ」が垣間見える作品。それに対して、市来氏の「コメント」が秀逸である。それらを先ず掲載し、両者の接点とその解析を行いたい。

はこだてにいった

Y

あのね、このまえ、はこだてにいったよ。そして、よる、イオンにいきました。ゲームをしました。また、いきたいです。

※（市来氏の励ましコメント） かいものをすると、いろん

なものがかえて、そしてI君のよろこぶかおが、さいこうのかいものなのかな。かえりのくるまのなかも、みんながまんぞくしたふんいきで、かえってきたんだらうね。（傍線部は筆者||荒木）

題が「はこだてにいった」であり、本文はたった三文の素直な文章。小学一年生が頑張って書き綴った文章を、指導教師はどう導きどうコメントするのか悩んでしまう。イオンに行ったのは「だれだれ?」「ゲームだけでなく他は何をやったの?」と子どもに寄り添いながらも、書くべき他のものを「広げる」形で助言するであろうが、市来氏は全く違った。

もっと書かせようとする「広さ||多種多様性」ではなく、「書いたもの」に対してまず評価（価値）を与え、全く異質な「笑顔（感情）」に置き換えて「励ます」指導形態をとる。それが、「いろんなものがかえて」の次に、接続詞「そして」で繋ぎながら「よろこぶかおが、さいこうのかいものなのかな」という名言で締め括る。

これは、私が常に提言している「広さ・深さ・高さ」の「高さ」に値する観点である。買物物の作文では、何をかったのという「広さ」、「なぜ」買物物に行ったのという、目的たる「原因」や「理由」を突きめる「深さ」である。しかし、「誰と」と言う広さや「なぜ、なぜ」だけの探究たる「深さ」だけでは、行き詰る「作文」。そこに「高さ」という全く異質で、地上高い視点からの考察、俯瞰する姿勢が必要となる。そうでなければ、「引き付ける文章」「読んでももらおうに値する文章」は書けない

ながらも、比類稀な「想像力」で書き綴っている点も見逃せない素晴らしさである。

この「ポスター」の動物たちを釧路動物園に例えて、見えな
いものを観たように表現する「作文」は、私達がめざす「究極
の到達点」であろうと評価したい。「想像力」は三点、①「〈無〉
から〈有〉という、新しいものを創造する力」②「他者に立場
に立つ労わりや思いやりの心情の育成力」③「離れたあるもの
と全く別のものを繋げる力」、これらのイマジネーションがどれ
だけ「国語力」を促進するか分からない程の成果を生むと私は
関挙げる。斎藤氏は最後のまとめ「半年の学習を振り返って」
の中で、「書くことで自分のしたことを言葉で整理して意味付け
ること」を強調する。「意味付け」とは、今までの評価という現
在地に「新たな価値」を付け加えるのである。

したがって、「作文」とは、過去の出来事を正確に記すだけで
なく、書き綴ること、過去の出来事を《追体験》しつつ、現
在さらには未来に呼び戻し、そこに新たな価値を創造すること
であると私は提案したい。もう一本、私の「読書感想文マニユ
アル論争《その1〜3》」は割愛する。「読書活動」については
次章で叙述しよう。

④ 「図書館活動」における読書の役割とは

この分野での実践報告は一本、次のレポートである。

「学びをアシストする学校図書館について【10の提言】
『学校図書館の『役割』と、学校図書館の『利用』と、学校

図書館をつくる『ひと』」 (加藤孝志 札幌西陵高)

北海道の教育において、「学校図書館」の位置付けが低く、学
校図書館に学校司書の配置等の問題もあり、「情報センター」と
しての効果的な図書館活用が叫ばれている現在(註3)。そんな
問題を深く提起しながら、「活用・利用」を図る実践報告であ
る。その目的は「(授業の) 課題設定と解決」「必要な情報の収
集と活用」、それだけに終わらず「探究活動の充実」を掲げて、
貴重な提言を行っている素晴らしい実践報告である。

グローバル化やIT情報機器の発達等で社会の急激な変化が
あり、教育界でも「学校図書活動の在り方」もその環境に従っ
て「変容」せざるを得ない状況である。近年「アクティブ・ラ
ーニング」の推進もあり、それに十分対応できる「活動」が求
められている。「学校図書館機能の到達段階」の六段階という指
標は、参考になる指標であろう。一段階の「本の置かれている
場所」から最高の六段階の「学びの中核・拠点としての『情報
センター』』という位置付けが目標として示される。

提言の六点を上げると①「学校司書の配置」②「図書館オリ
エンテーション開催」③「〈お手軽投げ込み〉図書授業の提案」
④「AIを構成する〈四つのC〉で学校図書館を再設定する」
⑤「教育課程の外でも学校図書を」⑥「学校図書館をサブカル
チャーの砦に」⑦「社会と繋がる場としての学校図書館」
⑧「使える、役立つ、助かる、コンビニとして。『開いて手良か
った』(お金以外何でも貸す)」⑨「自主活動のセンター」⑩「サ
ードプレイスとして(学校・家庭でもない居場所)」である。

このような提言に耳を傾け、「国語教育」の充実に役立てるべきだと加藤氏は、強調する。

⑤「ディベート」を活用しての「国語教育」の在り方

この「ディベート」の実践では次の報告がなされた。

加藤育野（礼文町香深中）氏 「ディベート」

この実践は教育出版の教科書3年生にある「ディベート」の単元を活用し、2年生では「夏の葬列」「流れメロス」、3年生では「新しい博物学の時代」をテーマに取り組んだ実践報告となっている。ディベートは肯定側・否定側と分かれて行う「模擬討論形式」。加藤氏は、国語教育の様々な教材をより認識・理解し、読解を深めて、多様な意見を集約する方法を独自に模索し、「ディベート」を有効に活用する。

例えば「加藤育野ルール」である。それは、チームのメンバーが4〜5名。これは、「全員が発言しないと負け」という規制をかけ、全員による全員参加型の「討論」を促す効果的な方法である。また、肯定・否定側はくじで決めて、自分の意に反する場合でも、「他者の視点による理解」を心掛ける配慮をしている点も素晴らしい創意工夫である。

この実践を通して「改善した点」を三点上げ、子どもの姿勢の変化も見られ、成果（重要性）を述べている。先ず、改善したのは、①テーマは今まさに議論されている論点の選択する重要性②パソコン等で必ず「調べ学習」の時間を取る重要性③司

会も生徒自身でやらせる重要性である。

①の「テーマの喫緊性」では、「制服と私服の問題」「少年犯罪における実名問題」などどれも日本社会の重要事項であるだけでなく、中学生にも必然的に差し迫った課題は、難しさ故の「言い逃れ」ができず、どの生徒も必死になって思考すると指摘する。

② 下調べは最低でも二時間を要し、徹底的に調べさせ、その多くの資料をまとめ、整理し、その中から自分の考え（思考）を確立させる方法を模索している点は評価したい。

③ 司会も生徒が行うので「ルール」の厳守、他者の意見をよく聞くようになり、全体把握からの現在地の理解という場が設定されて「促す」「遮断する」「まとめる」などの、総合的な「判断力」が付くと評価する加藤氏。

最後の「おわりに」では、普通の授業では「何も残らない」がディベートでは、自発的に話し合い、心に多くの「議論の意味」を刻み、成果も多いのではないだろうかと述べ、他教科へも広げていきたいと抱負を語る。

論議では、ディベートの生徒による「自主性」「活発性」「論議上の争点による接点」など評価すべきところはあるが、問題点も指摘された。それは、自分の考えを無視し、偶然性（くじ選択）で「側」を決めることが、自分の考え（本来の意思＝真実）と異なり、「主体性への偽り」「主張への躊躇」などの問題である。もう一点は、話し方や考え方は、常に流動性を伴い一定の「型」の固定しておらず、変化・発展するにも拘らず、それを「束縛」する方向性があるのではないかという指摘である。

そのような批判に対して、デイベートという討議の「学習形態」は、「論議の仕方（ある理想的な思考の深化を、疑似的な一定の《型》としてを学ぶ）」（他者視点の介入による）問題探究の広がり」を追求するを目的としている以上、十分に配慮して進めるべきであると私も同感する。各教科書で「取り扱うべき内容」として、論議のできない中学教育において、「効果的な学習・研究方法」の一つであると思う。加藤氏は、さらに「アクティブ・ラーニング」の課題も取り込み、さらに「深い学び」という「ディープ・ラーニング」も視野にいれ、この実践を取り組んでいる姿に非常に好感が持てる（註4）。次回、さらなる「実践報告」を期待したい。

「国語教育」の分科会のまとめは、これで閉じたい。

〈註1〉 竹内常一。全国生活指導研究協議会常任委員。生活指導書だけでなく、「国語教育」にも著書があり、『読むことの教育―高瀬舟、少年の日の思い出』（山吹書店2005年）など注目される。

〈註2〉 朝日新聞（2018/3/26）「教育」欄の特集記事。PISA A に対するの批判では、米国の学者から①「一つの尺度測定の問題点と多様性の重視②「測定調査が単純化の問題」③「テストの常設化による教師の自主性の喪失と子への悪影響、その結果教育の貧しさを招く弊害」等も指摘する。

〈註3〉 成田康子氏『みんなでつくる学校図書館』（岩波ジュニア新書）が興味深い。30年間の学校司書としての経

験を一冊に凝縮。今は札幌南高校勤務。

〈註4〉 「アクティブ・ラーニング」と「ディープ・ラーニング」については、松下佳代氏『ディープ・アクティブラーニング』（勁草書房2015年）が名著、参考になる。一読を乞う。マスコミや『要領』などでは「アクティブ・ラーニング」と「・」を入れるが、松下氏は入れない。注視したい。松下氏は「行動的学習形態」となるが、『要領』ではあくまで「行動的《な》学習形態」となりその本質的差異を軽視できないであろう。